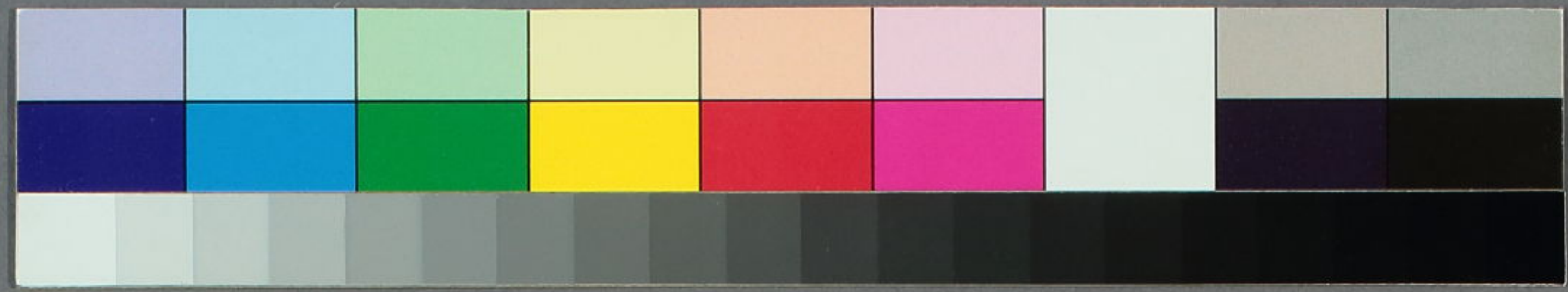


Handwritten Japanese calligraphy on aged paper. The text is arranged in three vertical columns, reading from right to left. The characters are:  
Column 1 (right): 行 (Yuki)  
Column 2 (middle): 是 (Shi) and 切 (Kiri)  
Column 3 (left): 去 (Iku) and 風 (Kaze)  
The characters are written in a cursive style (sōsho). There are also some faint, illegible markings on the paper.





喜のや遊いつらして毎匹北總素迪

欠して肥ちつすふちるは夕三顧

先嬌し家七種の花明る花美

きをさあいなしよふき一の声雪悟

消さく月と半りひ田く音路哉

高木の芽や草の生へくはこほし桂之

芝草の物ふまし春と青柳と栞翠

一日も言た日多しとて梅の志之細

志の守む出まこころとて土生秀幽篁

雪洞雪洞

梅咲はこえ画のうらまは二友任家青兎

あし神もかのこ秋とあく陸半免

ハ玄糸も盤能りりり喜の丸葛良

牛啼は小息明ても柳柳耕壽

曙を中あしつてむ岨の香石鯢

口の二層もすまゝハまがり板の芽白免

蓬草の存しそつろそ代いの事蓬呂

よみあやうすの声も志るじ魚民

苗代り凡情おとてつ晴蕉月

是をくよ嘆ともまじりけ此路の梅季益

ちる花の芽小咲く小川に 春水

忘色戸也 催のうらもおほらあ 青岐

梅の春の名をふるくし九十九 羅川

のふまのふ紙拾ふよ梅をよ 胤文

負釣りの控し糸巻よ写姓 正元

春おろし海士も小傘のう木履 楚篁

梅の春やかしの風も何のほ 百壽

字の色の春のこころとくハ月夜が 笑樂

空一のめつしくりや門折 池月

鶯の春中よこりくまのる 胤行

とつちうと見ても梅とニ輪 東鳥

鈴戸也や梅より寸毫のおほら 喜雀

董の垣根よりハヤと鈴りハ 渡燕

梅の春やかしの梅の春 仙玉

藤原舟より梅の春小川に 祇白

梅を散るはさきも之を梅花 羅川

春風より早深雪の白ひうか 龍肖

不梅の月事一の風情うか 吟音

清がの柳子めてハハ 梅の春 梅屋

百三日梅もやけりハハハハ 梅朝

石垣の白ひしも 花舟

道中く白すく 至長

字の尾末の音も 蕉

名入て梅もして 胡蝶

月さすハ舞界も 素鳳

管のや衣の 素襦

さく梅也新の 可々

席くさ記也 可々

枚葉も花も 焚香

夏も冬の物も 馬逸

小雀も 如翠

萩の音も 真枕

あつ風の里も 怨橋

花の子も 可哲

花の音も 東洋

のけろふの 彩石

大寺や 狛毛

さこの 電路

梅又て 拈後

梅の乳障子も 管教

何れ先の口は赤紅物よたら様 不脱

雪の書もあつらん百子多 里角

けしきも穉流るゝあの上 牛來

ゆふちあかあき阮のぬれれ 月波

芽柳の自慢白あつるの者 松二

生魚のくうあ里や山くう 金波

湯登りや登り存ををあれり 波及

このちろあやるうまふ風くさ 青岱

梅の香や多川杯あれハ博奕宿 茶岐

黄きのあつり起りりそこの名 松林

嘘ホの写りもあつるの心 維平

下せぬや銀治の朝鶴の古く下 吳笠

雪の首もけりや 籬の者 簑輔

培尾を不二のまじりやあつる とも母

松風よ系つてわく海の味 寛龍

燈山よ降おく輝くまの心 杜好

はよ竹もあつるを小字も多きま 双樹

首と多てまゝらん 粥 閑齋

山姥の在所をむくまの山 其羽

おとしらぬつちあつりしるまのり 兄直

うらふすまふとて 呉くはの不二 太節



まあ、うらふ中へ又中へ小村南總 呼午

何本やうきあつてく解の池 桃支



聖日ても何りあつても何きと夕崇州 有美

こまこされ 虎の尻又よ真の月 里石

四つこや我葉 細ももるの風 由之

むちをまてしあつての海よまの舟 在久

隙多のまつての世とて酒の味 機息

何本やうらうとて 何れも 桐木の井 知声

雪をもててくまのまてて 存きを 釣魚

まあ、何れや又男へ通ふま 田川 古挿

まあ、まのまててく 独りま 嵩栖

面あつてのまててく 何れも 雲槎

何月や画よま 何れも 青山

新のまのまててく 何れも 福燕 柙枝

葉のまやまのまててく 何れも 龍尾

桜うら 何れも 何れも 山路 桑泉

夕東風を字し 何れも 何れも 草歌

はるるや秋のゆき雪のそくねし 雪守  
ふりそぬぬのぬやゆゆ 初梅 菊雅

こころ又老も花よ進身也 成美  
山吹り屋やふりり 松花堂 道彦

甚難や野のつらしのうきさふ 巢北  
茶の把さくもあつめぬ花 其堂  
つむじや茶の木のつらもむつら 一瓢

杓花垣の目もろも楊や舟の隆 梅壽  
そこのそ田こしの物も門行 浙江

貝の寄る風もつらや親すめより 固

うを我も似るふ日張の土も 胡平

そこの算もそくくねら互あか 一蕙

のつけや山あけひもふも 田窪彦

あすのをも何ふとやふり鳥 る川母

はもとて雪のゆき根存る 守静

茶のわ先ともの人の皴 一茶 在江戸

旅中

よく雪もあつめやふりて雪舞のほ 蕉雨  
園趣て死も寝ぬ離る 幽晴



松と水はともて正月七おふめ 凡魯

文音

夜を月より乳をて寐やう庵の<sup>大坂</sup> 貞齋

母を山よりあむ一人と糸を<sup>尾崎</sup> 春入

春字よりつゝ置とて我庵<sup>真</sup> 乙二

梅雪や雪日の<sup>全吉屋</sup> 志賀の山 士朗

立おいて

~~~~~の女子<sup>お</sup>~~~~~ 葛齋

午の巻



